

悲しい昔話④

味覚の秋です。食欲の秋です。秋は何と言っても果物です。

ところが、わが家には昔から果樹というものはいっさいありませんでした。柿の木はありましたが日本柿という種類で大きく赤く色づくのですが固いうちは渋くて全く食べられません。冬の保存食として干し柿にする種類です。

当時、甘柿のある家の子が本当にうらやましく思ったものです。お隣には百目柿^{ひゃくめがき}という食べ頃になると先端がクモの巣状にスジが入る甘柿がありました。木の背丈は低いくせに実をたわわに実らせます。さるかに合戦のように木に登らなくても十分手が届くところに実をならせるのです。何度、悪魔の誘惑に駆られたかわかりません。しかし、そこは幼くても善悪の判断はしっかりしている私です。危険な冒険をしなくても、お隣の子と仲良くすることで得られることを幼心に学習していました。生きる力です。

考えてみれば、わが在所^{ざいしょ}では果樹のある家はどの家も名家です。もう1軒の地主様の家には甘柿は言うまでもなく『びわ』や『ざくろ』という何となく異国風の果物までありました。この家には仲良くできそうな年頃の子どもがいなかったので残念ながら口にすることはできませんでした

子どもの頃に食べたあの百目柿を最近になって食べる機会がありました。本当に懐かしい味でした。しかし、何と固くて淡泊な味なんでしょう。富有柿の甘さ、みずみずしさに慣れてしまった私の舌はもう百目柿にもどることはできません。ただ、私は百目柿のおいしさを知っていますが、もしかしたら、地主様の子どもたちはその百目柿のありがたささえ知らなかったのかも知れません。私は幸せです。

